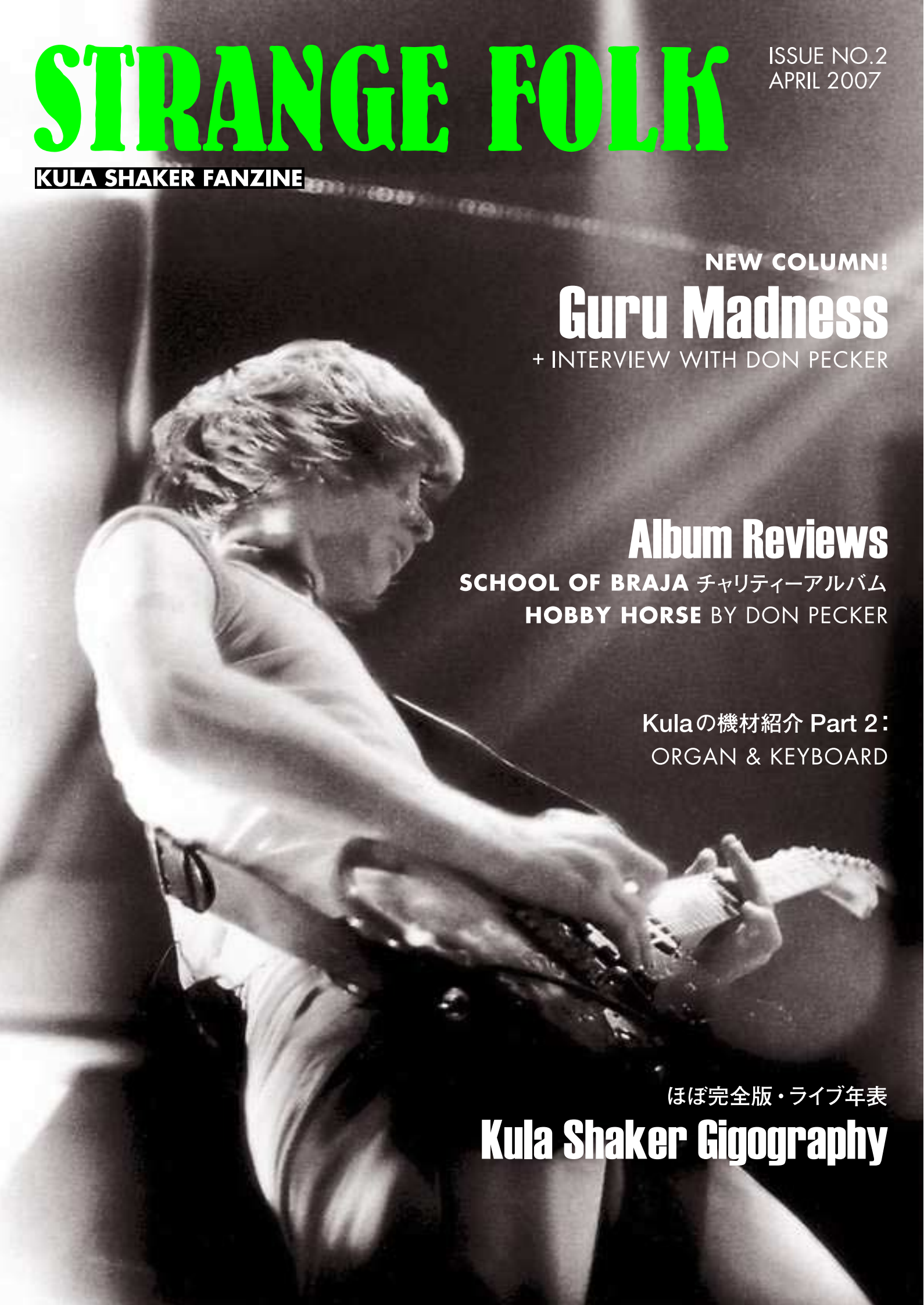


STRANGE FOLK



KULA SHAKER FANZINE

ISSUE NO.2
APRIL 2007

NEW COLUMN!

Guru Madness

+ INTERVIEW WITH DON PECKER

Album Reviews

SCHOOL OF BRAJA チャリティーアルバム

HOBBY HORSE BY DON PECKER

Kulaの機材紹介 Part 2:
ORGAN & KEYBOARD

ほぼ完全版・ライブ年表

Kula Shaker Gigography

Hello and welcome

長らくお待たせしました、STRANGE FOLK 第2号です。まさに今、刺激的な新しいKula-Yearの始まりの時です！ 私たちはたくさんの独占記事や刺激的なネタとともに戻ってきました。十分待った甲斐があったと思ってくれたら嬉しいです！

まず始めに、STRANGE FOLK 第1号をダウンロードしてくれたすべての人々に多大な感謝の言葉を言わなければなりません。楽しんでもらえてうれしいです！

Kula Shaker再結成からなんとか1年以上が経ち、その間には様々なことが起こりました。Kulaは、3rdアルバムの最終作業に入っています。私たちは、すべてのファンの気分を維持するために、この疑いのない世界に今号を放つのに時が熟した！ と思いました。

第1号でも述べたように、伝説のDon Pecker自身についての独占インタビューがベールを脱ぎます（バンド独自の狂気のグル）。

次号に向けて、Johnny Kalsiへのインタビュー、ほぼ完璧なKula Shaker、The Jeevasのブートレグ・ディスコグラフィー、さらなる独占インタビューや、Piの短いライブ活動についての徹底的な分析が進行中です。（実際には、有効な資料が存在していません。もしどなたかPiのライブに関する情報をお持ちでしたら、smokinmojo@hotmail.com までご連絡ください。情報を下さった方は、私たちの永遠の謝意を得るでしょう）

しかしその時まで、私たちのささやかなKulaコレクション Part2を楽しんでください。そして、第3号に向けての心構えをしておいてくださいね！

Daniel & Andrea

編集者へのコンタクトは、以下のアドレスまでメールをお送りください。

Daniel smokinmojo@hotmail.com

Andrea hosannah@t-online.de

Contributors



Editors :

Andrea Zachrau (hosannah@t-online.de) + photos

Daniel S. Taylor-Lind (smokinmojo@hotmail.com)

Layout :

Anni Kotisalo (anni.kotisalo@gmail.com)

今号に寄稿してくれたすべての方々にも感謝いたします。

BIG thank you to -

Don Pecker and Family

Clare (artwork)

Susheel Kumar

Jennie Reynolds

Mayuko and Mizuho (日本語翻訳)

Sarah Burton

TheMusicElitist

Esther Tienstra (coverphoto)

Strange Folk メーリングリスト :

<http://launch.groups.yahoo.com/group/StrangeFolkZine/>

このオンライン・ファンジン は、<http://www.kulashaker.net> より発行されています。

※訳者より:

これは、オリジナル版発行者である Andrea さんの許可を得て和訳してあります。また、本文中のスラング、ジョークは上手く訳せていない／訳していない箇所があります。読み苦しいところがあるかと思いますが、訳者は英語上級者ではありませんのでお許しください。 (英語が読める方は、オリジナルの英語版を読むことをおすすめします!)

- 2** あいさつ
- 4** 目次
- 5** ニュース、噂&トリビア
どのメンバーが、以前、聖歌隊員だったのかはここでわかります
- 7** **GURU MADNESS** コラム
Strange Folk独自のグルによる独占レギュラーコラム
- 8** TIME RISING OVER YOU
Andrea Zachrauによる、輝かしいThe Jeevasの上昇と下降の記録
- 11** **SCHOOL OF BRAJA**
最新のKula Shakerによるチャリティーへの取り組みについて
by Andrea Zachrau
- 12** SOUND OF DRUMS タブ
おそらく、このクラシックソングの最も信頼できるタブ
by Daniel S. Taylor-Lind
- 15** **DOWN THE RABBIT HOLE**
唯一無二の人 Don Pecker、世界独占インタビュー。騎士の分身 The Kays、首なし教祖&ストレッチリムジン
by Daniel S. Taylor-Lind
- 18** THE ALTERNATIVE T IN THE PARK REVIEW
2体のダッチワイフと、そう、Kula Shaker!
by Jennie Reynolds
- 20** **HOBBY HORSE** アルバムレビュー
by Daniel S. Taylor-Lind
- 22** THE MEDIAEVAL BAEBS
簡潔なヒストリー by Sarah Burton
- 25** KULA SHAKER GIGOGRAPHY
ほぼ完全版・Kula Shakerライブ年表 1993～2006 by Andrea Zachrau
- 31** KULA SHAKER 機材
TheMusicElitistによる簡潔なKula Shakerオルガンサウンド解説
- 33** イラスト: by Clare

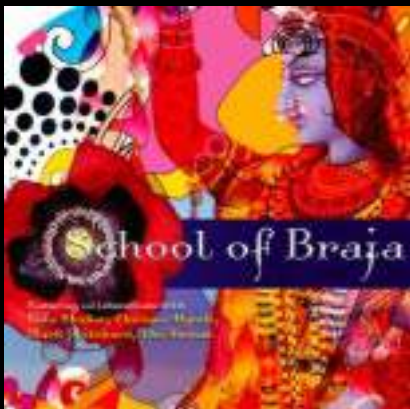
News, gossip & trivia

Kula Shakerの13曲入りサード・アルバムは2007年夏に発売予定で、プロデューサーはTchad Blake、ミックスはKula ShakerとDaved Brinkwork (DavedとはMark Pritchardを通して知り合い、彼はまた『School of Braja』のエンジニアでもありミックスも手がけている)、そしてこのアルバムもまた自己資金で制作されたのです!

2006年9月にPaulと話した時、アルバムのレコーディング中、彼らは段々少し退屈して来ていると言っていました。というのも、プロデューサーのTchad Blakeは長時間労働が好きじゃないから、彼らは時間を持て余していたんだって!

本誌は、Kula ShakerがJohn Leckieとの仕事をまったく気に入ってなかったことも明らかにします。彼らは『K』のセッションがとても不満だったので、アルバム発売のためにJohnと仕事をする前に録ったものもいくつか使用したのです!

チャリティーCD『The School of Braja』(1万枚限定)は昨年秋に発売されました。このアルバムは伝統的なインドの讃歌から成っており、Crispianによるプロデュースで、Kula Shaker、The Jeevas、Chrissie Hynde、Mark Pritchardなどが参加しています。去年の夏のKula Shakerの最後のライブで販売され、その後、オンラインミュージックストアを通して販売されましたが、すぐに売り切れました。もし急げば、<http://bhaktistore.info/> にまだ在庫があるかもしれせん。



日本盤『Revenge of the King』(Garage EP)は現在HMVで輸入盤として購入でき(店舗、オンライン販売共)、値段は非常に高く、£13.99です。2006年3月14日にスコットランドのRadio Clydeで行われたライブセッションでの“Govinda”がボーナストラックとして収録されています。



Kula Shakerの1995年のデモ・カセットテープがeBayに出品され、落札した人が親切にもその2曲をMP3に変換してアップロードしてくれました!

その2曲は、『K』のものと殆ど同じバージョンの“Kinght On The Town”と、別の歌詞がつけられている、もっとロックなバージョンの“Shower Your Love”です。

本誌はまた、AlonzaがDIYに夢中で、常に家で物を壊していることも暴露することが出来ます。

Alonzaと彼のパートナーであるAudreyは、将来Kula Shakerの曲になる可能性がかなり高い“Shadow”という曲を含めた、8つのアシッドフォークな曲を共に書きました。

Crispian MillsとKula Shakerに焦点を当てた『Faith and Music』というドキュメンタリーが、12月18日(19日と言えるかもしれません)、イギリスの地上波テレビで放映され、“On the Highway”、Crispianのソロが原曲の“Be Marciful”、歌詞が異なるバージョンの“Diktator”の、新曲3曲が通しで演奏されました!



次の彼らのリリースは日本盤EPで、ニューアルバムからの曲とライブトラックが収録されます。発売日は今のところ5月16日。（※訳者注：ご存知の通り、5月23日に無事発売されました）

アルバムの発売日が延期になった理由は、彼がマスターテープをプロデューサーから手に入れられてなかったから！（これはただの噂だってことを念頭に置いてください）



バンドは、Crispianが海軍の正装をしたウェブキャストを通してファンと接しています。またこのショートビデオクリップには、“Hurricane Season”という新曲の断片が含まれています。このビデオはここで見る事が出来ます：

http://youtube.com/watch?v=n2oJK_mbik8

もしくは、オフィシャルサイトからダウンロード出来ます：

<http://www.kulashaker.co.uk/media/captcabin.wmv>

また、Kula Shakerは2007年2月から現在までに、4つのpodcastをリリースしています。1つ目は大部分がCrispianとAlonzaによるもの（Alonzaは、カップリングに収録された“The Leek”で初披露したウェールズアクセントで喋っています）

<http://www.kulashaker.co.uk/media/kulashakerpodcast01.mp3>（Part 1、2月4日）

そしてその追加として、Harryによる1つ目のpodcastのリミックス

<http://www.kulashaker.co.uk/media/kulashakerpodcast02.mp3>（Part 1.5、2月11日）

それから、バンドからのメッセージとKula バージョンのProdigyの曲のヘンテコなミックス

<http://www.kulashaker.co.uk/media/kulashakerpodcast03.mp3>（Part 2、3月6日）



最新の音声とビデオのもの

<http://www.kulashaker.co.uk/media/kulashakerpodcast04.mov>（Part 3、3月20日）

Kula Shakerは、去年のVフェスティバルでの演奏は楽しなかった。というのは、彼らが予測していたよりも早く、強制的にステージを離れさせられたから。それはKula Shakerの歴史上、“Govinda”を演奏しなかった数少ないステージの一つ。

大事なことを言い忘れていたけど、Alonzaはかつて少年聖歌隊員だった！

Strange Folk 独自のグルによる独占レギュラーコラム

Guru Madness

GOLF, CRAZY GOLF, MYSTICAL GOLF... AND YES, GOLF

恐らくGuru Madnessとは誰かという話から始めなければならぬだろう、基本的に、Guru Madnessとはアーサー王の宮廷にいる神聖な道化師のことである！ 彼の役割は、現実における観点の代わりを置くことだ。なぜならGuru Madnessは退屈していて、人生がとてもありふれているので、彼は物事をねじ曲げなければならないからだ！

Guru Madnessの今の任務は、皆に（神秘のリス、サギ鳥、そして神秘の騎士たちをフューチャーした）“神秘のゴルフ”を教えることだ。なぜなら、Guru Madnessはゴルフを“高貴なゲーム”そして“非常に文明的”であるものとして見ていたからだ。

Guru Madnessは、逆転心理学を使って神秘のゴルフを教える（もしくは心理学の逆転!）。なので、「ボールであるのではなく、ボールを持つことだ」。

Guru Madnessがこの任務についている理由は、“イルミナティ”（訳者注：キリスト教 秘密結社のひとつ）が本当に実在しているのかどうか、確かではないからだ（もし彼らが実在していたら、Mr. Bush Jr. – ブッシュ大統領 – は、彼らの長だろう）。しかし、世界中のすべての力を持つ人々はゴルフをし、そして“イルミナティ”もゴルフをするに違いない！ Guru MadnessはMills氏と共に、反撃する方法としてゴルフを使用している。

しかし、Guru Madnessがその対応に当たっており、イギリスのゴルフ界がゆっくり浸透している今、**誰もが**ゴルフをやりたいがっている。

もうひとつのGuru Madnessのプロジェクトは、聖地にゴルフコースを作ることだ。それは殺風景な砂漠の真ん中にある、野生生物の安らぎの場所となるだろう。なぜなら

Guru Madnessが言うように、神の全能な自己は、神の親友のARJUNA GURAとゴルフをし、ブラックホールの中へと惑星を打つからだ。

Guru Madnessは、Mills氏にもゴルフを教えていた。そして彼のハンディは……クラブ（冗談ではない!）だということも明らかにした。Crispianがケツに大きい穴を持つ限り、彼は決してゴルフをすることが出来ない。しかし彼は根気強かった。（Guru Madnessは、Crispianがこれを読んでもっと上手くなるよう練習に奮起するように、こう言っていた!）

Guru Madnessが持つ他のゴルフプランは、彼とFrankie Dettori（記：Guru Madnessは、彼に乗り方を教えた……馬の乗り方ではない）、そしてCrispianとAlice Cooperとでチャリティーゴルフマッチを企画することだ（本誌は、これについての情報を皆さんに逐一お知らせします!!）。

そしてもうひとつ進行中のゴルフプランは、Guru Madnessのために、イングランド初の全てが有機体のゴルフコースを作ることだ。それは完全に有機体のみで、自然港や灌漑地を作るような方法で設計した。

これは“狂ったゴルフ”ではなく“狂気（Madness）のゴルフ”だ。

さらなる狂気の到来を期待する。

*The Right Hon. Sir Guru Madness the First,
7th of June in the year of Our Lord 2006*

TIME RISING OVER YOU



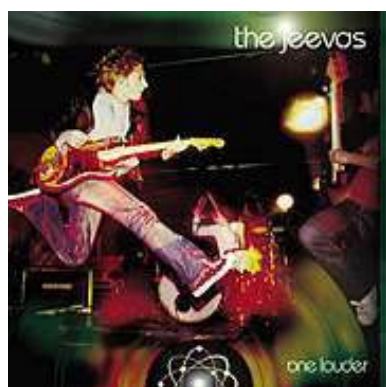
THE HISTORY OF THE JEEVAS
by Andrea Zachrau

Kulaのメンバーが何かしらバンド活動をするとはもうないのかと諦めかけていたところに、いくつかのうれしいニュースが聞こえてきました。

**Crispianは新しいバンド、The Jeevasを結成しました。Kula Shaker解散後もミルズ氏の動向を気にしていた人々は懐疑的でしたが、と同時に興奮しました。The Jeevasとは一体何だったのでしょうか？
新たな音楽革命の始まりだったのでしょうか？**

2001年、CrispianはドラマーのAndy Nixonと、ベーシストDan McKinnaと共にバンドを組みました。2人はBristolを基点に活動していたバンド“Straw”のメンバーでした。それはとても完璧な相性のようでした。3人はアイデアがいっぱいで、スタジオに入るのが、なおさら、ツアーに出るのが待ちきれなかった。

まずはいくつかのサウンドファイルをインターネット上にアップすることから始まりました。それはThe Jeevasのオフィシャルサイトの掲示板上のファン達を興奮させ、時々あったバンドからの書き込みで、その興奮はさらに煽られました。



彼らは、日本限定リリースのデビューシングル『One Louder』から活動をはじめ、続いて限定盤7インチバージョンの『Scary Parents』をリリース。まもなくして、アルバム『1234』も

到着しました。それによって、The Jeevasのファンベースはどんどん大きくなっていきました。

彼らがついにツアーを始めたときには熱狂的に歓迎されました。彼らはイギリス中で、そして日本やヨーロッパでも数回ライブを行い、幸運にも2003年のGlastonbury（イギリス最大のフェスティバル）に出演しました。

『1234』には、シングル“Virginia” “Scary Parents” “Ghost (Cowboys in the Movies)” “Once Upon a time in America”といったいくつかの際立った曲が入っていましたが、チャート上位に入ることは一度もありませんでした。Crispianのしていたことは、どのKulaファンにも受け入れられるというものではありませんでした——それは思っていたよりも大きな壁だったのです。ファンが入れ替わる中で、The Jeevasはどんなことでも熱心に支持してくれる固定ファンを得ていきました。



ファン達は辛抱強くあることに慣れていましたが、The Jeevasは十二分に活動的でした。1枚目のアルバムリリースから約12ヵ月後、『Cowboys and Indians』が2003年10月3日に発売になりました。それは3週間以内にレーディングされ、ほとんどの曲は昨年のツアー中に書かれたものでした。アルバムタイトルがほのめかすように、The Jeevasは（開拓期の）アメリカ西部に行きました。John Wayneのテーマからきているわけではありませんでした——確かに、若干のノスタルジアが続いていたとしても。それはとても現代風で、深い真意や政治に関する批評を含んだロックンロールでした。

“How Much Do You Suck?” は、アメリカのフィルムメイカー Michael Moore に影響されています。カッコいい Bob Dylan のカバー “Masters Of War” も収録されています。“The Way You Carry On” に続いて次のシングルに彼らを選んだのは、ベトナム抗議歌である “Have You Ever Seen The Rain?” でした。この曲のオリジナルは、John Fogerty (Creedence Clearwater Revival のメンバーとして有名) によって書かれたものです。

長期にわたる UK ツアーが続きました。『Have You Ever Seen The Rain?』は 2004 年 2 月にリリースされ、これは The Jeevas の最後のシングルとなりました。日本とスペインでの何本かのライブが続きましたが、その後は静かになりました。長きにわたってオフィシャルサイトに新しいニュースは載らなくなり、掲示板でのファン同士の会話も次第に静まっていました。

2005 年の年末には、解散の噂はもっともらしくなり、そして突然、生きている証拠として、Crispian からの手紙がオフィ

シャルサイトに公表されました。「僕は東ヨーロッパにいた間ずっと記憶喪失に見舞われていた。最後の 4 ヶ月はベオグラード (ユーゴスラビアの首都) の通りを彷徨い歩いていたんだ。裸でね。」時を同じくして、Crispian はミステリアス・プロジェクトを発表。「僕たちは、君たちの世界を揺さぶり、目を 1 インチ深く頭に押し込むであろうことを確信している。君たちは興奮するだろう。このプロジェクトはすぐに明らかになり、議論されるだろう。」

The Jeevas をフューチャーした正式な最後のレコーディング曲は、2006 年に発表されたチャリティーアルバム『School of Braja』(2004 年録音) に、Kula Shaker などと一緒に収録されています。彼らの解散についての正式な発表は一切ありませんでした。しかし、その一番の証明は、2005 年末に Kula Shaker が再結成され、Dan と Andy は新しいカントリー・ロック・バンド “The Magic Bullet Band” に参加しているということでしょう。



School of Braja

「発狂するギター、リフ、そして絶えず心に浮ぶ、恐ろしいほど驚異的で清らかな瞬間、表現力、ドラムを叩き、ラッパ、コンク貝を吹く、陽気で、雰囲気がある、いたる所での愛情…輝かしく、素晴らしく、恍惚とする」

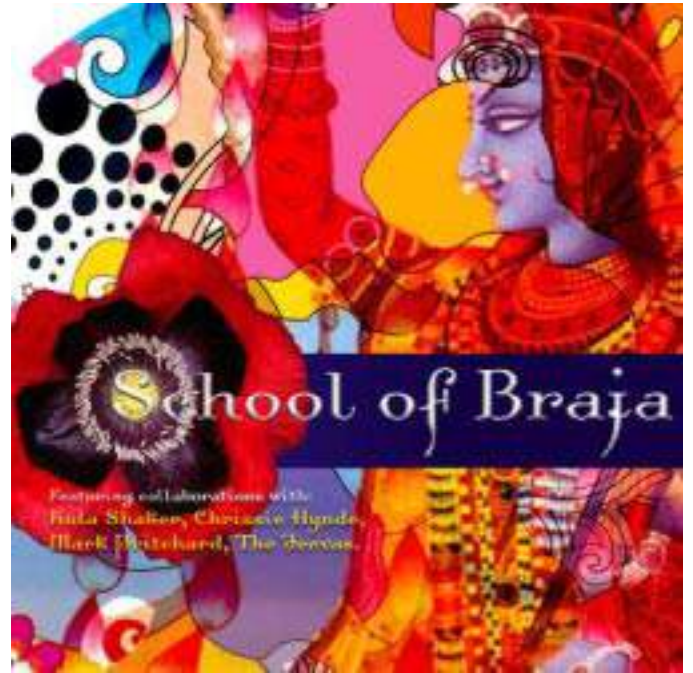
– Indupati Monk, UKより

長らく待たされたチャリティーアルバム、『SCHOOL OF BRAJA』は、とうとう2006年10月にリリースになりました。それは、伝統的なバジャン、キルタン、ブラジャ民族の歌（ヒンドゥー信仰の歌/神々を讃える歌）のように、礼拝のインド音楽が収録されています。カリフォルニアの学校、New Brajaの生徒たちは、Kula ShakerやThe Jeevas、The PretendersのChrissie Hynde、DJ・プロデューサーのMark Pritchardと一緒に演奏しています。

プロデュース、アレンジをCrispianが担当、CDには、詞の対訳と、歌の背景にある信条についての解説が載った、CDサイズの美しいハードカバーのブックレットが付いています。カラーの美しいたくさんの絵に加え、ブラジャ文化の伝統やバクティ・ヨーガの神聖なアートについての案内も載っています。

CDにはThe Jeevasをフューチャーした2曲、“Song of Braja”（女性シンガーのためのバックトラック）、そして“Radha Ramana”（バックコーラス：Chrissie Hynde）があります。Kula Shakerの曲は“Braj Mandela”です。

上で述べたように、これはチャリティーアルバムなので、売上のすべてはカリフォルニア州BadgerのNew BrajaとGaurasundar Prabhu基金に寄付されます。



The track-list:

1. Blessings
2. Song of Braja (Featuring The Jeevas)
3. Song of Braja (Part 2)
4. Prayer to the Golden Avatar
5. Supreme Goddess Meditations
(produced by Mark Pritchard)
6. Braj Mandela (Featuring Kula Shaker)
7. Gopi Lullaby
8. Krishna Kirtan
9. Radha Ramana
(Featuring The Jeevas with Chrissie Hynde)
10. Jaya Radha Madhava

BONUS TRACKS

11. Nadia Godrume
12. Gauranga Tumi

Sound of Drums

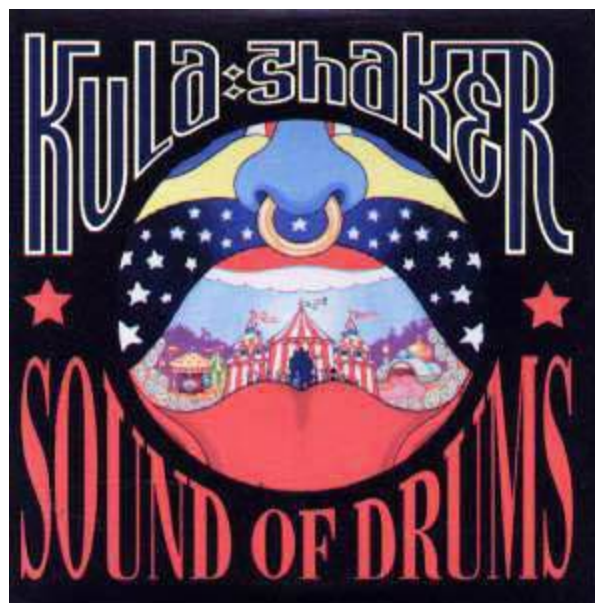
THE DEFINITIVE TAB

Chords used:

E
E7
D
A
A7
G
B
Bsus4/2

Bsus4/2:

E-x—
B-2—
G-4-
D-2—
A-2—
E-x—



Intro

E7

E—
B—7—8—10—
G—7—7—7—9—7—7—7—
D—
A—7—7—7—7—
E—

E—
B—
G—7—7—7—9—
D—9-h-10-9—7—
A—7—7—7—7—
E—

(Under the verse Crispian is either playing the intro riff or just strumming E7)

Verse 1

E7
I hear the sound of drums and a melody
E7
I hear the sound of drums
E7
Singing the names above in the city yeah
E7
Revolution for fun

Verse 2

E7
I feel the time has come like a remedy
E7
I feel the time has come
E7
I was shaking the spear of love in the city yeah
E7
I hear the sound of drums

D
Yeah yeah

Chorus

G | B | E | D

G | B | E | D
But can you feel the love for me

D
Yeay yeah
D B
I feel the time has come
D B | Bsus4/7 | E | B
I hear the sound of drums————

Verse 3

E7
I feel the sound of drums and a melody
E7
Calling me to return
E7
Well light up and catch the sun in the city yeah
E7
Revolution for fun

D
Yeah yeah

Chorus

G | B | E | D

G | B | E | D
But can you feel the love for me

D
Yeay yeah

G | B | E | D

D B
I feel the time has come
D B | Bsus4/7 | E | B
I hear the sound of drums————

B | Bsus4/7 | E | B
Drums————

Pre solo interlude

E—0-0-0-0-0-0-0-0-0-0-0-0-0—
B—5-5-5-7-7-7-7-3-3-3-5-5-5-5—
G————
D————
A————
E————

SOLO (just play over these chords 'till the vocals come in)

Em | G | A | A
Ooh——

Em | G | A | A
Ooh——

Em | G | A | A
Ooh——

Em | G | A | A7
Ooh——

Em G A A
Well I feel the time has come and a melody
Em G A A
I see the golden one
Em G A A
Well I'm not the only one with the remedy

D B
I'm not the only one
D B
I feel the time has come
D B | Bsus4/7 | E | B
I hear the sound of drums————

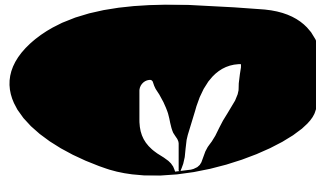
B | Bsus4/7 | E | B
Drums————

B | Bsus4/7 | E | B
B | Bsus4/7 | E | B (ad lib over these chords 'till the end!)

E7

Down the Rabbit Hole

AN EXCLUSIVE INTERVIEW WITH DON PECKER!



僕がサマセット州奥地、真の聖地の名もない駅にぶらりと行ったのは、ある素晴らしい夏の日だった。何が目的かって？ それはかの有名な、Kulaの親友、サイケデリックな勇士、真の神秘の男、Kulaだけの“狂気のグル”であり、Kulaの復活においてとても頼りになる男、Don Peckerへインタビューするためだ。

“Sound of Drums”のシングルEPを持っていない人達には馴染みがないだろうが、そのカップリング曲である“Fairyland”はDonの曲であって、EPではKulaはDonのバックバンドとして演奏している。

僕がその神秘的な駅でDonを待つことになったのは、数週間前にキングストンに気まぐれで行った時に偶然Donのハイ・ストリートでの路上ライブに出くわしたからだった。僕

たちはミルトン・キーンズでのライブ以来お互いに覚えがあった。そして彼の人生においてキングストンでの路上ライブはたったの2回目だったので、これは現実だろうかと目を疑った。

僕たちは談笑し、彼はサマセットにある彼の“ウサギの穴”に招待してくれ、僕は彼の誘いに応じた。僕はちょうど彼が住んでいる通りから数マイル下ったところで生まれたので、その辺のことは良く知っていたのだ。

そして2ヵ月後、僕は駅で彼を待っていた。Donは、彼の秘密のウサギの穴へ僕を連れて行った。そしてそこへの招待がいかに特別なことか、どれほどの大金を払わなくてはならないほどのことかがわかった。そう、僕は自らの不滅の魂をかけて、Donに誓わなければならなかった。(勇敢な読者諸君、決して怖がることはない。僕は魂を取り戻してきたから。魂の車検みたいだ。)

明らかに、これはグル・マッドネス（いくつもあるDonのあだ名のうちのひとつ）と会った時に起こったことだ。基本的にDonとのミーティングは、真剣に受け取らずに疑って聞くことだね、ほんと！

陽光に輝くイングランドの田舎町をドライブ中、僕はDonにその秘密の場所の位置を誰にも話さないと約束した。さもないとパパラッチがやってきて窓の外でたむろして歌うだろうけど、聞きたくないだろうね。「だってヤツはひどい声をしているだろうからな」（Pecker氏の発言の引用）。

僕が必ず秘密を守ることを誓った後、Donは“303”の裏話を教えてくれた。殆ど（90％）をAlonzaが作ったということ、Donと面識のあるインド人のグル、Jay Tirthapad Maharageについて書かれたものだということ。彼はDonに緑色のメルセデスを与え続けていたが返され、またもう一度ガソリンを満タンにしてDonに返した。なぜなら（強いインドなまりで）「神が、これはDonが持つべきだと言ったんだ。」この曲は基本的に、彼らが“303号線”にあるDonの家に車で向かい、そして彼らのドライブが警察に止められたことについての曲だ。なぜならその緑色のメルセデスは、盗難車として登録されていたからだ。彼らに車を与えたグルは、彼の最も信心深い弟子に彼の頭を切り落とされ、彼は不名誉な結末に達した。よって“夜の首なし教祖よ どういう意味か教えてくれ”と歌われているのだ。しかし、Kulaメンバーは逮捕されなかった。なぜなら、彼らは彼らのラッキーナンバーにいかなる危害も加えられないように守られていたからだ。

僕たちは、イングランド郊外の中心地にある目的地に到着した。Donの家は、Donが助け出した馬2頭が住む牧草地に接していた。僕らは（大きくて人懐こい黒い犬を跨いで）中へ入り、お茶を飲み、素敵なベジタリアン・サンドウィッチを食べ、Donと彼のパートナー Mother Shiptonと色々なことについて（Kulaのことや、Kulaのことじゃないことも）楽しく会話をして午後を過ごした。

Donは間違いなく、多様な事柄や時間の中で面白い生活を送っていた（落下傘兵、ゴルフキャディー、お抱え運転

手、そしてミュージシャン）。彼は酉年生まれ（1945年）なのでPecker（キツツキ）という名前である。彼の父親は海軍だったため、Donは学生（5～16歳）の間に合計52回も引越しをしたそうだ！

彼らの家はヒンドゥーの神々の印刷物に覆われているが、最も誇れる場所はリビングルームであり、そこには“円卓の騎士”のアーサー王の聖杯の大きなカラーポスターやそれぞれの紋章がある。The Kaysが彼らの分身を選んだのは、まさにそのポスターからだった（詳しくは後ほど）。Donのファミリーはとても親切にもてなしてくれて、会話では言葉が自然に淀みなく出てくる。Kula Shakerにとっても精通している誰かの頭脳を引き出すことができるのが、とても魅惑的だった。僕は用意してきた35ページ分の質問をすっかり忘れ、ただ絶え間なく会話し続けた。

会話の間、マントルピースの上にあるくすんだ写真に僕の目は引き付けられた。それは有名になる前の若々しいKula Shakerで、Paul、Alonza、Crispian、Jo（Crispianの奥様）、そしてJayが（はっきり言って、Jayの髪は本当にドイツ軍のヘルメットカットだった）、Donが彼らに買ってあげた赤いバンの前に立っているものだった（その車は元々、地上に落ちた落下傘兵を拾うのに使われていたものだった）。まもなくして僕らは、Donが本当はどうやってKulaと知り合ったのかについて話した。Donは90年代に記者たちにはまったくのデタラメ（彼らがインドのAshramで会ったという話など）を言っていたけど。Donが実際に始めてCrispianと会ったのは、Crispianが11歳の時だった（1983年頃のはず）。Donは父親代理状態で、タクシーでCrispianを学校へ送って行ったり、世話をしたりしていた。そしてCrispianにギターを教えたのは実はDonなのだ。

DonとCrispianは、よくロンドン中の路上で（オックスフォード・ストリートetc）古いRolling Stonesの曲を演奏していた。Donによると、CrispianはRolling Stonesにとっても夢中になる時期を経験し、15歳の時には、自分はBrian Jonesの生まれ変わりだと思いこんでいた。DonはCrispianがどのくらい本気だったのか定かではない、というのもCrispianは本

当に良い俳優なので（驚いたことに、どこからその才能を得たんだろうか?）。彼は後退セラピーまで受けたんだそうだ!

どうやら Crispian の母親は、初めは Don と Crispian との友達関係に用心していたらしい。Don のことを、自分の子供をさらいに来た現代のハメルンの笛吹きの子供の類いだと思っていたようだ。彼女は、少しプレスが変になってきた時には（1997 年頃）“Crispian の今後を駄目にするようなこと”をプレスに話すのはやめなさいと電話までしてきたらしい。Don は Crispian を初めて Glastonbury Festival に連れて行った人でもある。その時 Don は、グリーン・ハウス・ステージに出演していた（1988 年だったと思う）。そのステージはイズリントン・ヒッピー（※訳者注：ロンドンの北東部にある自治区にいるヒッピー）のためのもので、若干 15 歳で Crispian は初めてステージ上でギターを演奏した。おまけに、Don のバンのマットレスに隠れて、忍び込んだそうだ!

バンドは Pilton（※訳者注：サマセット州の村）（そして Glastonbury）を、観光客で賑わう今どきの場所は別として、神聖な領域と見なしている。その地域はイギリスの神話や、聖杯にまつわるミステリーが豊富にある。Paul は Glastonbury の近くで育った。Kula が Glastonbury Festival に出演したときには、会場から逃げ出して、Paul の両親のプールでくつろいでいたそうだ。

Don はしばらくの間、Jay が入る以前には The Kays の一員でもあった。彼らは、本当に自分たちが“現代の聖杯探求に出かけた騎士”だと思い描いた…それで、彼らは皆騎士の登場人物を取り入れ、騎士達のエネルギーを彼らの音楽で媒介しようとしたのだ!

本誌は、彼らのそれぞれの騎士の配役を独占的に明らかにしよう。

Paul は“Percival”、Alonza は“Gawain”、Don と Crispian は“Mordred”と“Arthur”を交互にしていた（やはりバランスを取らなければならないようだ!）。Don は、The Kays から Kula Shaker にバンド名を変えることをどう思うかという電話を Crispian から受けた時のことも思っている。Don の第一声は「何?! そりゃダサイ名前だな」。Crispian

はこう答えた。「うーん、それをダサイと思うんだったら、僕らがダサイだろうね。」もっとも Don は、一旦その名前の意味を説明されたらそれを気に入ったと言っている。インドのすべての寺院での第一段階のことを“Kula Sekhera”ステップと呼ぶそうだ。なぜなら、彼はとても謙虚で神聖な王で、自分が寺院の一員となるには相応しくないと思っていたため、いつも第一段階にいて、それ以上先には進もうとしなかったのだ。

僕らは、人々がどのように Kula Shaker を誤解する傾向があるのかということも話し合った。Don の考えはこうだ。「Kula は本質的なクリシュナ・バンドで、彼らの目的は、神に対する信仰的な愛情を広め、導くことだ。」（Don はこうも言っていた。「彼は、信じていることが正しいと思うならば、どんな言葉で歌うのかは重要ではない。その言葉よりも意図が大事なのだから。とは言うものの、彼はいい点を突いているね」）プレスは、バンドがインドに信仰的な側面をインチキな策略だと見ていたが、実際は、バンドはそれに非常に真剣に取り組んでているのだ。Crispian は“Brahmin 入門者”であり、Kula ファミリーは全員、ヒンドゥーネームを持っている。Don は“Murari Mohan”、Mother Shington's は“Jamuna Devi Dasi”、Crispian は“Krishna Kanta”。

Don はまたこうも言及している。今のラインナップはとてもいいので過去は水に流すべきだ、たとえ Harry がステージに立つ前にナーバスなって、全てのコードを忘れてしまったとしても。（そんなことは今までない!）

大事なことを言い忘れていたが、Don は、彼らのお抱え運転手をするために、Kula が赤い縦縞のサッカーボール付きの、大きな黒いストレッチリムジンを手に入れる必要があったと言っていた。僕はインタビューを終えて外に出ると、Don の馬たちに挨拶をし、駅まで送り届けてもらった。Don に別れを告げ、プラットホームの端に立っていると、僕の頭の中は別世界にいるかのように物凄い勢いでぐるぐるまわり、瞬間にありふれた現実世界のブリットレイルに引き戻されていた。

T in the Park 2006

THE ALTERNATIVE KULA SHAKER REVIEW

免責条項:このレビューは、このフェスに来ていない人にはちっとも分からないかもしれませんが、私はこの点に関して一切謝罪しません。加えて、事実、一昔前のことなので、私の記憶は健忘症の金魚みたい…。

ええと、私はKing Tut's tentでHope of the States（凄くつまらない）の間ずっと座ったままで、息を殺して彼らがステージに登場するのを待ってたの。私の可哀相なボーイフレンドのJeffは、その前の2〜3個のバンドの演奏中、Kulaの曲をノンストップでたっぷり一時間歌い続ける私に耐えなきゃ

いけなかった。でも、あなたはきっと私の感じていた興奮を理解してくれると思うわ。とにかく私はまああの場所を数体のエアードッチワイフ（フェスティバルでしか見たことないわ!）の後ろに何とか確保した。ボロボロの麦わら帽子をかぶった今どきの10代の女の子たちがみんなThe Kooksを見るために出て行ったから、テントは解散前のKulaを実際に覚えている人たちでほとんど一杯になった。ついに照明が落ちて、緊張が高まり、彼らがステージに出て来た。カッコいいクリーム色のスーツを着たHarryが最初に登場して、PaulはジーンズとTシャツとビーニー帽のいつもと同じカジュ

アルな服、Alonzaは普通だけど雰囲気のあるファンキーな帽子とサングラスの組み合わせで、そして最後に堂々とした赤いシャツと黒いベストのCrispian（魅力的）。

さて、多くの人にくだらない下手なレビューだと思われるかもしれないけど、曲順は分からないの。私はギグに夢中でセットリストがすっかり消えちゃった人々の中の一人だから（まあとにかく、セットリストはKulaのフォーラムにあるから）。でも全体的な雰囲気なら分かるわ。“Hey Dude”のような典型的なヒット曲は前に押し寄せる人の波で満たされて、まるで、1999年から眠り続けていたかのように忘れられていた愛情でバンドを包むかのようにだった。“Hush”のある箇所で、まるで観客が完全に調和して、一つの大きく揺れている物体になったみたいだった。



“Shower Your Love” はまた観客が大好きな曲で（私はそのライブバージョンのイントロがまさにThe Charlatansの“Country Boy”みたいだってまだ主張するわ）、殴られ続けていた2体のダッチワイフへ捧げられるべきだった。“Govinda” は本当に素晴らしかったわ、テント全体をフリーキーでサイケデリックなヒッピーの集会に変えてしまった。

EPからの1つ目の新曲を始めた時、正直言って、荒々しいスコットランドの観客がどれくらいそれらを好きになるかちょっと心配したんだけど、Crispianの素敵な髪に対する嘲笑や、「くたばれくそイングランド人!」といった罵声はなかった。全体的に見て、受けは良かったわ。新曲が、よりダーティーでロックな感じな上にシタールがないことに、皆凄く驚いたと思う！



テントの中は本当に最高の雰囲気で、ライブ中に素敵なバンドのメンバーたちと友達になって明日見に行くって約束したんだけど（あの件はごめんね、でもとにかくマルボロライトをありがとう）、それから、一曲目が始まって20秒後くらいでラッシュの最中でまんまとボーイフレンドを見失っちゃった、それがもう一つのお詫び。脱線しちゃったけど、とにかく、ブリットポップ全盛期を再体験することと新しい贈り物を聴くことの両方がうまく受け入れられた、素晴らしい演奏だった。ガッカリした人は誰もいなかったって心から言えるわ、完全に私のこのフェスティバルでのハイライトだった。

素晴らしかった！

Hobby Horse – Don Pecker

*"Can't stop the wind
Can't stop the snow
Can't stop the sun from shining
Through your window
Can't stop me,
And you can't stop you
Can't stop the soul from evolving
Where it wants to go"*

– All the Way Home, Written by Don Pecker

これはDonの自己資金・レコーディングによるアルバムで、彼自身による演奏とHobby Horesという名前の彼のバンドの曲が収録されており、非常に手に入れにくい。基本的に、路上ライブに出たDonから買わなければならない（今までは。下記参照）。非常によく成熟したアルバムで、もし分類しなければならなかったら、現代のフォークミュージックだと僕は言うだろう。じきに消えて行く今どきのクソみたいなフォークじゃなくてね。Donはこの手の音楽を過去30年やっているという印象を受けた。もちろん非常に上手い。

それで僕はKula Shakerのよりアコースティックないくつかの曲を思い出した（何しろDonはCrispianにギターの弾き方を教えたんだからね）。殆どの楽器がアコースティックであるにも関わらず、単に曲が作られて届けられるというようなアコースティックアルバムじゃないんだ、分かって貰えるかどうか分からないけど。焦点は、他のこと、精神的な歌詞や陽の光のハーモニー、インドのコーラスやたくさんのハンドドラムやオルガンに当てられているんだ！

アルバムは、フワッとしたオルガンの旋律と振動に満ちた非常にノスタルジックな“Have a nice day”から始まる。素晴らしい軽快なノリがあるね！“Pagan witches, ancient druids, all god's children, have a nice day”というボー

カルラインを好きにならずにはいられない。

次の曲は大部分がインストの“Foundry”、前述の曲と次の曲を上手く繋ぐ曲だ。次の曲は“Bom Shanka”、またもとても神秘的なナンバーで、ボーカルとギターにたくさんの壮大なリヴァーブがかかっている、シヴァ神に対するエレジーだ。

“The Ditty Thing”は、アルバムの中でまさに最もヒッピーなアップテンポな曲で、皆が演奏するのは素晴らしく楽しいということが分かるよ！

その次の曲（“Pray for Me”）は“Mondy I'm riding on my horse, Tuesday you'll find me on the golf course”という素晴らしい歌詞があり、かなり自伝的。このアルバムの多々の曲と同様に反復するテーマは旅であり、この曲ではそれが顕著だ。この曲もまた、晩夏の夕暮れを思い出するような、とてもノスタルジックな雰囲気がある！

僕は“I Have a Dream”はあまり好きではない。バラードのような曲で、多分十分に聴き込めていないんだろうが、いいメロディーはある！

次の曲は事実上完全に知っているの（ギターでも弾ける）、レビューするのは僕には難しい。“Fairyland”は1997年に『Sound of Drums』のカップリングとしてリリースされ（これは同じバージョン）、Donは（Jayを引いた）Kula Shakerに支援されている。ギターの短いリフで始まり、壮大なフォークソングの怪物になって行く。それから壮大なコーラスのクライマックスに達し、そして加速する妖精の笑い声と叫び声に満ちる。非常に幽玄で、ちょっと怖い！

“Mad March Hare”はちょっとした素敵な曲で、ナーサリーライムみたいだ。実にキャッチーで非常にシンプルで、複雑な見方をすれば、おそらくアルバムの中で最も伝統的なフォークソングだろう。

実を言うと“I Miss My Girlfriend”は初めのうちは好きじゃなかったんだけど、しばらくするとだんだん気に入って来た。そしてそれは、実のところ、ところどころCat Stevensの曲の1つを思い出させる。たった1本のギターとハンドドラムのたくさんのうねるFのコード、控え目に言っても奇抜だね！

“Disabled Nation”はアルバムの中で本当に壮大なロックで、西洋社会の精神の健全における社会的批評だ。サウンドは実にヘヴィーで、音楽の社会的解説と成功を兼ね備えるのは通常難しいが、これはそれをやっており、実に素晴らしい。これはフランスでレコーディングされ、Dave Goodman（伝説的な初期Sex Pistolsのプロデューサー。この曲で演奏もしている）によるプロデュースで、非常に素晴らしいギターの主題が反復している。おそらくこのアルバムで僕が最もお気に入りの曲だろう。

アルバムは“All the Way Home”で終わる。最後を締めくくるには何と素敵な曲だろう。これは生と死の必然性についての曲だと推測する。言うまでもなく、アルバムを上手く締めくくっている。

だから「誰がこれを気に入るんだ？」と尋ねられることは分かっている。ヒゲが音楽の一角に値し、奇妙で、神秘的

な鋭さがある、独創的な彼らの音楽が好きだと思う全ての人々にだ！個人的にはこれは非常に良いアルバムだと思う。何がそんなに凄いのかと言うと、深刻に考え過ぎないという気持ちだ！アルバムとして、間違いなくだんだん好きになる、おんぼろの古いベージュ色のSabb 900で走り回る時に聴くために買うべきアルバムのようなもんだね！

もしこのアルバムを購入したいなら、次の2つのメールアドレスの一つに連絡をください。

smokinmojo@hotmail.com

Peckerdon@hotmail.com

このアルバムは送料・梱包料込みで£6です。件名を“Pecker Album”としてください。全ての売上金は直接アーティストとTricky Warren Pony Rescue Sanctuaryに届きます！だから、どうか、どうかこのアルバムをコピーしたり他の方法でばらまいたりしないで！

Don Pecker - Hobby Horse
Private release

1. Have a Nice Day
2. Foundry
3. Bom Shanka
4. The Ditty Thing
5. Pray for Me
6. I Have a Dream
7. Fairyland
8. Mad March Hare
9. I Miss My Girlfriend
10. Disabled Nation
11. All the Way Home

The Mediaeval Baebes



The Mediaeval Baebesは、700歳の音楽を歌う、21世紀に堅く根差したバンドだ。彼女たちの刺激的で目くらむようなイメージと純粋な声は、世界中のリスナーの想像力を捕らえている。1996年の結成当初メンバーは12人だったが、長年に渡ってメンバーが脱退・加入し、現在は7人の女性から成っている。彼女たちの活動の間、Baebesは色々な幅広いアーティストと共に仕事をしており、最新の仕事はKula Shakerと行われた。しかしながら、このバンドのKula Shakerとの繋がり、音楽よりもさらに踏み込む…。

1988年、Crispian MillsとAlonza Bevenはリッチモンドカレッジで出会った。同じ頃、Katharine BlakeとRachel van Asch、Nichole Sleetもまた、リッチモンドカレッジで出

会った。KatharineはRachelとNicholeがオリジナルメンバーだった間、Baebesを作り続けた。これは2つのバンドの間の長年に渡る幸せな偶然の出発点だったようだ。The Kaysのぼんやりとした遠い過去、KulaのメンバーたちはKatharine Blakeの最初のバンドMiranda Sex Gardenと共にギグを行った。どうやらかなりイカれた夜があったようで、ギグはThe Lunatic FringeのS&Mナイトの朝早い時間に開催された。Kula Shakerの最近のEP『Revenge of the King』は、Baebesのクリスマスコンピレーションアルバム『Mistletoe and Wine』を手がけているSean Genockeyによるプロデュースである。これに追加されるのは、いくつかの、より個人的なコネクションだ。Paul Winterhartは元Baebeで創立メンバーの一人のNicole Frobuschと結婚しており、Alonza Bevanは現Baebeでオリジナルメンバーで

もあるAudrey Evansと結婚している。最近、産休中のAudreyはKulaとコラボレートし、“Revenge of the King”となる曲をAlonzaと共に書いた。時が経てば、最高の昼間のテレビ伝統の中で、AlonzaとAudreyが、夫と妻たちのコラボレーションによる素晴らしい進路に加わったかどうか分かるだろう。Kula Shakerはまた、5人のMediaeval Baebes（※訳者注：“Mediaeval Baebesのメンバーの子供”の意）のうち3人の父親になることで、文字通りMediaeval Baebesに追加している。PaulにはIvyとFayeという2人の娘がおり、Alonzaは、初のMediaeval Baebey boy、Lewisの父親になることで、長く語られていたBaebesは娘しか持てないという“呪い”を破った。事実、彼女たちのクリスマスのニュースレターにさえ記載されていた!

では、Mediaeval Baebesとは誰なのか、何なのか?

1996年、彼女たちは古典音楽の教育を受けたKatharine Blakeによって結成された。1991年、Portobello Roadで、Katharineは2つの違う音楽学校の卒業生に中世のマドリガルを歌っているところを見出された。このバンド、Miranda Sex Gardenは、古典音楽とフォークとロックを、リードシンガーのKatharineのキャバレースタイルの露出症と組み合わせた。1996年、Katharineはベルリンに渡り、そこで中世の音楽に傾倒している60歳過ぎのニューヨーカー女性、Dorothy Carterに会った。DorothyはKatharineに、Salva Nosというラテンの短い歌を教え、彼女をロンドンへ帰した。Katharineは自分の運命を受け入れることを決意し、素晴らしい仲間と共にバンドを結成した。それは当初は単に女友達と飲んだり歌ったりするための言い訳に過ぎなかったが、すぐに彼女たちが著しい才能の持ち主であることが明らかになった。1996年5月1日、ロンドン北東部の共同墓地で彼女たちは初めて実際のギグを行い、Mediaeval Baebesは真に誕生した。

Baebesたちは、全世界から呼び集めている女性の誰もが認めるエキゾチックコレクションだ。当初は12人で、Katharine Blake、Marie Findley、Nichole Sleet、Karen Lupton、そしてRuth Gallowayはいずれもイギリス出身である。しかしながら、他のメンバーは幅広い国から来ている。

Rachel van Aschはニュージーランド出身、Nicole FrobuschはドイツのMunsterの生まれ、Claire Ravelはテキサスから、Audrey Evansはブリュッセル、Teresa Casellaはカナダで生まれ、子供時代の殆どをイタリアで過ごし、ミステリアスなCylindra Sapphireはオーストラリアのシドニーに誕生した。それはRachelに彼女たちの形態を“不适当で、ありそうにない”と名付ける気にさせた、このバンドの驚くほど異種な性質であった。バンドは、現代のプリンスや妖精になりたいという願望を持った、幾人かの非常に風変わりな、非常に異なった女性たちが、実に思いがけず集まっている。しかしながら、ここ何年かでバンドは変わり、各メンバーの個別の生活に合わせている。殆どのメンバーが今なお日中の仕事を持っていることを考慮すると、それは容易なことではない。現在の構成メンバー — 創立メンバーのKatharine、Marie、Audrey、Cylindraに加え、より最近のBaebesである、オペラの教育を受けたシンガーEmily Ovenden、Baebeの長年の友達であったClaire Rabbit、そして芸術家であり、時にはQueen AdreenaのベーシストでもあるMelanie Garside（彼女はMaple Beeという偽名で演奏している） — である7を示すように、脱退したり加入したりしている。

Baebesの創る音楽は、それを創る女性たちのように多様性があり、非凡だ。彼女たち自身で書いている中世の詩と疑似中世音楽が大前提である。Katharineは幼少期より中世の音楽に興味を持ち、古典的な教育を受けたミュージシャンだ。その結果、魅惑的で楽しげな、柔らかい、そして心を高揚させる様々な音楽を生み出している。彼女たちは本物の音楽を創るのに学術的なアプローチを取らない。むしろ、時代の精神に目を配り、ロマンスの時代を再現し、陰謀と死を彼女たちの折衷的なハーモニーで貫いた。彼女たちは新しい挑戦に立ち向かうことを怖れない。殆ど全てのアルバムに、バラエティに富んだ殆ど忘れ去られた言語で歌っている曲が加えられている。中世英語やラテン語はもちろん、Baebesは中世イタリア語やフランス語、ドイツ語やウェールズ語だけでなくアイルランドのゲール語やマン島語、現代ロシア語、18世紀のスウェーデン語やコーンウォール語といったものだ。彼女らはまた、新しい音楽の手段を追い求める

ことにもひるまない。ファーストアルバム『Salva Nos』は、ドラムとオルガンで録音された、簡単な伴奏によるお粗末なものだ。3枚目のアルバム『Undrentide』で、彼女たちは、いくつかの奇妙な音楽をプロデュースしたThe Velvet UndergroundのJohn Caleと共に仕事をした。4枚目の『The Rose』は基本的にクラシカルなコンセプトアルバムで、楽曲は、すべてのその多種多様な形と意味合いで、主にバラの浸透する中世のイメージに集中している。

最も最近のアルバム『Mirabilis』はKatharineによってバンドのサイケデリックなアルバムとして評されている。どうやら、BaebesとKulaの間の繋がりは次第に強くなって来ているようだ！『Mirabilis』のサウンドは催眠作用があり民芸的で、超自然的なこのアルバムのテーマと、現世と来世の間の壊れやすい境界上にある。その音楽は、恐ろしいバイオリンの旋律を含み、美声による歌唱、“the Turkish saz”などのインストゥルメンタルに見られる明確な東洋の影響、インドのハルモニウムだけでなくウードをも取り入れている。それに加えてBaebesは“Scarborough Fayre”で彼女たち自身で演奏もし、Katharineの初期のジャズの影響を吸収した。彼女の兄（弟）と父親がいくつかの曲でサクソとトランペットを演奏している。

The Mediaeval Baebesは矛盾のあるバンドだ。彼女たちは空想的で理想主義的でありながら、同時に、生意気でセクシーで実に現代的な女性である。彼女たちのステージパフォーマンスは彼女らの音楽を促進しさえする。Baevesたちは、自身の服飾会社を持つオリジナルメンバーのRachelがデザインした、丈の長い、グラマラスなドレスを着てパフォーマンスをする。ステージ上で多種多様な神秘的で素晴らしい楽器を演奏し、それと同時に、中世の舞踊や楽曲の喜劇的な紹介をしたり、みだらな冗談を言ったりもする。

2006年、Baebesは10周年を迎える。既に1月に放映されたBBCのドラマ『The Virgin Queen』に彼女たちの音楽が導入されており、また、祝賀ライブの豪華なDVDとニューアルバムが計画されている。彼女たちに、驚くべき素晴らしい旅を止める兆しはない。

The Mediaeval Baebes

■メンバー

Katharine Blake : Katはフルタイムのミュージシャンであり、クラブのプロモーターである。大部分のBaebesの楽曲を書き、更にロンドンの2つのナイトクラブ、“Slappers”と“Queens of Sheba”のプロモーションをしている。

Marie Findley : Marieは映画雑誌Hotdogで記事を書いている。また多作なコメディライターでもあり、Jenny clairやAnt and Dec、Smack the Pony等書いている。

Emily Ovenden : Emilyは本が出版されている作家であるだけではなく、Stoke Newington（おそらく多くのBaebesとKulaの所在地）でAbney Public Hallも運営している。また、コーンウォール音楽の集合体Celtic Legendのメンバーでもあり、“Queens of Sheba”の共同プロモーターでもある。

Cylindra Sapphire : Cylindraは狂気のオーストラリアの“宇宙の妖精”（彼女の言葉よ!）で、ごく稀に現実世界を訪れる際には、どうやら彼女は理学療法士のようなのだ。

Claire Rabbit : Claireは最も新しいBaebeだが、長年の友人である。現在、修士課程で法律を学んでいる。

Audrey Evanse : Auderyはブリュッセル出身だ。かつては、Miranda Sex Gardenの様々なメンバーが出演した、Naked Goatという非常に奇妙なバンドで歌っていた。現在は、Kula Shakerの次の世代の世話をするだけでなく、幼児保育士としても働いている。

Maple Bee : これはMelanie Garsideがパフォーマンスをする際の名前である。MapleはBaeveの一員であるだけではなく、Huskiという音楽デュオの一員であり、また、彼女の妹（姉）のバンドQueen Adreenaでベースを弾くといった、自らのソロ活動のプロデュースもしている。

■ディスコグラフィ

Salva Nos – 1997

Worldes Blysse – 1998

Undrentide – 2000

The Rose – 2002

Mistletoe and Wine : A Christmas Compilation – 2003

Mirabilis – 2005

■公式サイト

<http://www.mediaevalbaebes.com>

Kula Shaker Gigography 1993-2006

1993

as The Kays

10th Dec, London, Hoxton, Bass Clef

1994

as The Kays

APRIL

25th, London, Islington, Powerhaus

26th, London, Fulham, The Sawn

MAY

24th, London, Borderline

25th, London, Covent Garden, Rock Garden

JUNE

1st London, Kentish Town, Bull & Gate

11th, London, Fulham, The Swan

14th, London, Shepherd's Bush, Bottom Line

22nd, London, Fulham, Kings Head

JULY

19th, London, Kentish Town, Bull & Gate

AUGUST

6th, London, Water Rats, Splash Club

26th, London, Water Rats, Splash Club

OCTOBER

20th, London, Water Rats, Splash Club

26th, London, Ealing, Thames Valley University

1995

as The Kays

FEBRUARY

7th, London, Camden Town, Dublin Castle

MARCH

9th, London, Water Rats, Splash Club

18th London, Fulham, The Swan

25th, London, Camden Town, The Monarch

APRIL

14th, London, New Cross, Amersham Arms

MAY

25th, London, Camden Town, The Falcon

JUNE

6th, London, Camden Town, The Underworld
(supporting Reef)

as Kula Shaker

JULY

22nd, London, Camden, Monarch

29th, London, Splash Club (with Hooker, Cable)

SEPTEMBER

5th, Manchester, Holy Zoo (In the city unsigned,
Joint Winners)

OCTOBER

9th, London, Splash Club (with Slipstream,
MS.45)

19th, LA2 (with Supergroove, Fat)

26th, Reading, Alleycat Complex





NOVEMBER

- 1st, London, Splash Club (with Baby Bird, Laxton's Superb)
- 16th, London, Splash Club (with Blessed Ethel, Bawl)
- 24th, London LA2 (with Jocasta, Chillum, Mad Carson)
- 30th, Reading, Alleycat Complex

DECEMBER

- 1st, Tunbridge Wells, Forum
- 13th, Manchester University (Supporting The Presidents of the United States of America)
- 14th, London, Garage (supporting PUSA)
- 15th, London, Splash Club (with Mini Bar, Sister)

1996

FEBRUARY

- 16th, London, Astoria (supporting Mother Earth)

MARCH – GERMANY

- 31st, Berlin, Loft (supporting PUSA)

APRIL – EUROPE - (supporting PUSA)

- 2nd, Hamburg, Logo
- 3rd, Lyon
- 4th, Marseille
- 12th, London, Astoria
- 13th, Wolverhampton, Wulfrun Hall

MAY – UK

- 17th, Chelmsford, Army and Navy
- 18th, Coventry, Colin's Kitchen
- 19th, Blackwood, Miners Institute
- 21st, London, 100 Club
- 23rd, Nottingham, Rock City
- 24th, Middlesborough, Arena (cancelled?)
- 25th, Hastings, The Crypt (cancelled?)
- 26th, Brighton, Brighton Festival
- 27th, Derby, The Garrick
- 29th, Stoke, The Stage
- 31st, Liverpool, Lomax

JUNE – UK

- 1st, Warwick, Warwick University
- 3rd, Edinburgh, Venue
- 4th, Greenock, Ricos
- 6th, Manchester, Road House
- 7th, Leeds, Brighton Beach
- 8th, York, Fibbers
- 9th, Sheffield, The Park
- 12th, Hull, The Room
- 13th, Reading, Alleycat
- 14th, Tunbridge Wells, Forum
- 15th, Bath, Moles

JULY – UK

- 8th, Brixton Academy (supporting PUSA)
- 14th, Kinross, T in the Park
- 18th, Stratford-on-Avon, Phoenix Festival
- 30th, Hull, The Room
- 31st, Birmingham, The Foundry

AUGUST – UK

- 2nd, London, Astoria
- 10th, Knebworth (supporting Oasis)
- 16th, Middlesborough, Arena
- 18th, Chelmsford, V96
- 23rd, Hastings, The Crypt
- 24th, Reading Festival

SEPTEMBER – UK

- 13th, Wembley Arena, Top of the Pops
- 19th, Dublin, The Music Centre
- 20th, Belfast, The Empire
- 23rd, Norwich, University of East Anglia

24th, Northampton, Roadmembers
 26th, Newcastle, Riverside
 27th, Glasgow, Plaza
 28th, Sheffield, Leadmill
 30th, Cambridge, Junction

OCTOBER – UK – GERMANY

1st, Portsmouth, Pyramids
 3rd, Leeds, Metropolitan University
 4th, Manchester, Academy
 5th, Wolverhampton, Wulfrun Hall
 7th, Bristol, Bierkeller
 9th, Cardiff, University
 18th, Cologne, Luxor
 19th, Hamburg, Logo
 21st, Berlin, Loft
 22nd, Stuttgart, Villa Berg
 25th, Munich, Backstage



NOVEMBER – USA, CANADA, JAPAN

4th, Atlanta, Cotton Club
 7th, New York, Irving Plaza
 8th, Philadelphia
 9th, Washington D.C., 9.30 Club
 12th, Boston, Paradise Rock Club
 14th, Toronto, Opera House
 16th, Chicago, Double Door
 17th, Detroit, 7th House
 19th, Seattle, Moe's (cancelled)
 21st, San Francisco, Bottom of the Hill
 22nd, West Hollywood, Whiskey-a-Go-Go
 29th, Osaka

DECEMBER – JAPAN

4th, Tokyo, Shinjuku Liquid Room

1997

JANUARY – UK

13th, Dublin, SFX
 14th, Belfast, Ulster Hall
 16th, Manchester, Apollo
 17th, Manchester, Apollo
 18th, Doncaster, Dome

20th, Glasgow, Barrowlands
 23rd, London, Brixton Academy
 24th, London, Brixton Academy
 26th, Plymouth, Pavilion
 27th, Birmingham, Aston Villa Leisure Centre
 28th, Leicester, de Montfort Hall

FEBRUARY – USA, CANADA

2nd, Memphis, 616 Club
 5th, New Orleans, House of Blues
 6th, Houston, Numbers
 7th, Austin, Liberty Lunch
 8th, Deep Ellum Live
 10th, Lawrence, Kansas, Granada Theatre
 11th, St. Louis, Mississippi Nights
 13th, Cincinnati, Bogart's
 14th, Cleveland, The Odeon Concert Club
 15th, Pittsburgh, Metropol
 17th, Toronto, Opera House
 18th, Montreal, Le Spectrum
 19th, Boston, Avalon



MARCH – EUROPE - USA

17th, Madrid
 20th, Munich, Schlachthof
 29th, Vancouver, Graceland
 30th, Seattle, DV8

APRIL – USA

1st, San Francisco, Live 105
 2nd, San Francisco, Fillmore
 3rd, Los Angeles, El Rey Theatre
 4th, Los Angeles, Promo
 5th, Phoenix, Electric Ballroom
 7th, Denver, Bluebird Theatre
 9th, Minneapolis, First Avenue
 10th, Milwaukee, The Modjeska
 11th, Detroit, St. Andrew's Hall
 12th, Chicago, The Metro
 14th, Atlanta, The Roxy
 15th, Nashville, 328 Perf. Hall
 17th, Washington, D.C., 9.30 Club
 18th, Philadelphia, Theatre of Living Arts
 19th, New York, Irving Plaza
 20th, New York, Irving Plaza

MAY – EUROPE

8th, Gothenburg, Scandinavium (supporting Aerosmith)
 10th, Stockholm, The Globe (supporting Aerosmith)
 12th, Oslo, The Spektrum (supporting Aerosmith)

15th, Helsinki, New Hall (supporting Aerosmith)
 17th, Nürburgring, Rock am Ring Germany
 18th, Nürnberg, Rock im Park Germany
 19th, Pinkpop Festival Holland
 20th, Prague, Sports Hall (supporting Aerosmith)
 23rd, Vienna, Stadthalle (supporting Aerosmith)
 25th, Milan, Forum (supporting Aerosmith)
 27th, Rotterdam, Ahoy (supporting Aerosmith)
 29th, Ghent, Flanders Expo (supporting Aerosmith)
 31st, Washington, D.C.

JUNE – EUROPE

7th, Lyon, Halle Tony Garnier (supporting Aerosmith)
 9th, Zurich (supporting Aerosmith)
 11th, Paris, Bercy (supporting Aerosmith)
 13th, Barcelona (cancelled?)
 14th, Madrid (cancelled?)
 24th, Helsinki, Tavastia
 26th, Denmark, Roskilde Festival
 28th, Glastonbury Festival

JULY – EUROPE – UK

11th, Switzerland, Out in the Green
 12th, Glasgow, T in the Park
 24th, City of Birmingham Symphony Hall, A Classical Extravaganza, 50th Anniversary of Independence of India and Pakistan

AUGUST – USA – UK – EUROPE

1st, Sommerset, Wisconsin, Rivers Edge, Horde tour
 2nd, Troy, Wisconsin, Alpine Valley, Horde tour
 3rd, Chicago, The World, Horde tour
 5th, Syracuse, NY, Vernon, Downs, Horde tour
 6th, Hartford, The Meadows, Horde tour
 8th, Boston, Great Woods, Horde tour (headlining 2nd stage)
 9th, Boston, Great Woods, Horde tour (headlining 2nd stage)
 10th, Albany NY, SPAC, Horde tour (headlining 2nd stage)
 12th, Wantagh, NY, Jones Beach, Horde tour (headlining 2nd stage)
 13th, Virginia Beach Amphitheatre, Horde tour (headlining 2nd stage)
 16th, Chelmsford, V97
 17th, Leeds, V97
 22nd, Lowlands Festival, Holland
 24th, Thurles, Tipperary, Day Trip to Tipp

1998

JANUARY - USA

20th, Los Angeles, Viper Room

MARCH - UK

25th, Torquay, Riviera Centre
 26th, Southampton, Guildhall
 27th, Cambridge, Corn Exchange
 28th, Cardiff, University
 29th, Nottingham, Rock City

APRIL – UK

1st, Dundee, Caird Hall
 2nd, Newcastle Mayfair (cancelled)
 4th, Liverpool, Royal Court (cancelled)
 5th, Leeds, Town and Country
 6th, Blackburn, King George's Hall
 8th, Wolverhampton, Civic Hall
 9th, London, Forum
 10th, London, Forum
 12th, Liverpool, Royal Court
 13th, Newcastle, Mayfair

MAY – UK

2nd, Belfast, Blackout Festival

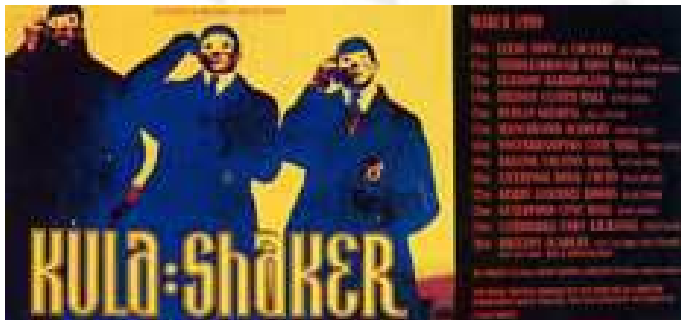
1999

JANUARY – UK, EUROPE

12th, Birmingham, Foundry
 14th, Liverpool, Lomax
 15th, Manchester, Roadhouse
 16th, Portsmouth, Wedgewood Rooms
 18th, Paris
 22nd, Copenhagen, Pumphuset
 23rd, Oslo, John Dee, Rockefeller
 26th, Cologne, Prime Club
 27th, Hamburg, Logo
 29th, Brussels, La Botanique

MARCH – UK

2nd, London, 100 Club
 3rd, London, 100 Club
 4th, London, 100 Club
 5th, London, 100 Club
 10th, Leeds, Town and Country
 11th, Middlesborough, Town Hall
 13th, Glasgow, Barrowlands,
 14th, Belfast, Ulster Hall
 15th, Dublin, Olympia
 18th, Wolverhampton, Civic Hall



19th, Bristol, Colston Hall,
20th, Liverpool, Royal Court
22nd, Derby, Assembly Rooms
23rd, Guildford, Civic Hall
24th, Cambridge, Corn Exchange
26th, London, Brixton Academy
27th, Manchester, Academy
28th, London, Kentish Town Forum

APRIL – USA – EUROPE

3rd, Chicago, Metro
14th, New York, Bowery
21st, San Francisco, Fillmore (cancelled)
25th, Ghent, de Vooruit
26th, Tilburg, 013
28th, Düsseldorf, Tor 3
26th, Hamburg, Docks

MAY – EUROPE

1st, Copenhagen, Vega (cancelled)
2nd, Oslo, Rockefeller
3rd, Stockholm, Cirkus
5th, Berlin, Columbia Halle
6th, Amsterdam, Paradiso
9th, Paris, Elysee Montmartre
10th, Stuttgart, Theater Haus
11th, Zürich, Volkshaus
13th, Madrid, Salle Riviera (cancelled)
14th, Barcelona, Bikini (cancelled)
16th, Modena, Vox Club
18th, Milan, Propaganda
20th, Vienna, Libro Music Festival (cancelled)
21st, Nürnberg, Rock im Park, Germany
22nd, Nürburgring, Rock am Ring, Germany
24th, Landgraaf, Netherlands, Pinkpop Festival

JUNE – JAPAN – UK

2nd, Tokyo, Sun Plaza Hall
4th, Yokohama, Kanagawa Kenmin Hall
5th, Tokyo, Zepp Club
6th, Tokyo, Zepp Club
8th, Nagoya, Koseinenkin Hall
9th, Osaka, Zepp Club

10th, Fukouka, Zepp Club
25th, Glastonbury '99

JULY – CANADA – USA

5th, Toronto, Opera House
6th, Detroit, St. Andrew's Hall
8th, New York, Irving Plaza
9th, Boston, Karma Club
10th, Philadelphia, Theater of Living Arts
12th, Washington, 9.30 Club
14th, Atlanta, Cotton Club
16th, Chicago, Metro/Smart Bar
17th, Minneapolis, First Avenue
19th, Denver, Bluebird Theater
21st, Lost Angeles, Mayan Theater
23rd, San Francisco, Fillmore
30th, Music & Extreme Sports Festival (cancelled)

AUGUST – UK – EUROPE

6th-8th, Valencia, Benicasim Festival
11th, Goonhilly Downs, Lizard Eclipse Festival
21st, Chelmsford, V99 Festival (substituting Placebo)
28th, Hasselt, Belgium, Pukkelpop Festival '99
20th, Biddinghuizen, Holland, Lowlands Festival



2006

MARCH– UK

11th, Milton Keynes, Snow Dome

APRIL – UK

3rd, Coventry, Colosseum
4th, Northampton, Soundhaus
7th, Manor Quay, Sunderland University
8th, Glasgow, ABC
11th, Manchester University
12th, Nottingham, Rescue Rooms
13th, Kings College, London

MAY – UK

9th, Bristol, Fleece
10th, Leeds, Cockpit
11th, Portsmouth, Wedgewood Rooms
13th, Liverpool, Stanley Theatre
14th, Sheffield, Plug
15th, Glasgow, Billy Sloane Show
17th, Norwich, Waterfront
18th, London, Scala
19th, Oxford, Zodiac

JULY – UK – JAPAN – SOUTH KOREA

6th, Aberdeen, Café Drummond
8th, Edinburgh, Liquid Room
8th, Balado, Kinross, T in the Park
29th, Japan, Fuji Rock Festival
30th, South Korea, Pentaport Rock Festival

AUGUST – UK

18th, Brighton, The Old Market
19th, Chelmsford, V Festival
20th, Weston Park, Stafford, V Festival

DECEMBER – SPAIN

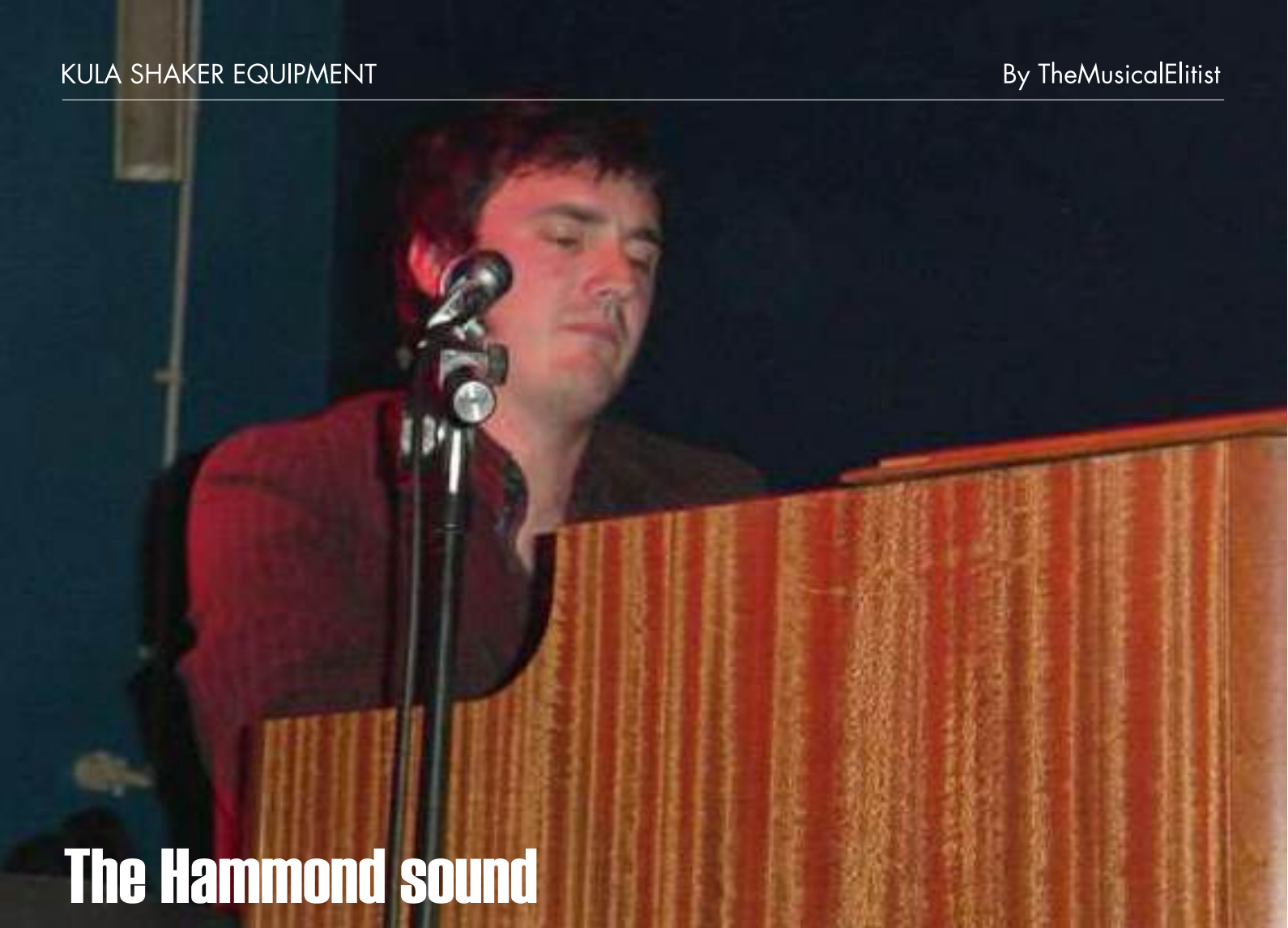
9th, Leon, Purple Weekend



London, Scala, May 18th 2006

NOTE: SOME OF THE DATES MAY BE
WRONG; MAY NOT HAVE HAPPENED OR
SOME MAY BE MISSING

注：いくつかの日程は違っている（実際には行なわれていないものや抜けているものがある）かもしれません。



The Hammond sound

こんにちは、そして陽気な称賛をKulaの楽器オタクであるキミたちに。再びKulaの楽器セクションへようこそ。

連載第二回目は、主にキーボードについて話すものとする。

“Grateful When You're Dead”の冒頭の音から“Sound of Drums”の終わりの数小節まで、Jay Darlingtonによって、そして今はHarry Broadbentによって見事に演奏されているキーボードは、Kula Shakerのサウンドに不可欠なものである。このセクションは、以前はよく称賛を得、Kula Shakerのサウンドに素晴らしい質感を与えていたキーボードに付いて分析することとする。

ハモンドオルガン

ああ、そうだ。信頼出来るハモンドオルガン。1934年、

クリエイターのLaurens Hammondによって最初に開発された楽器である。それはパイプオルガンの安価な代替品として教会に売られた。やがて、1960年代や70年代を通して、多くのバンドが自らの楽曲の中で使い始めた。Led ZeppelinやYesといったバンドや、むろんKula Shakerもだ。



オルガン自体は、トーンホイールのカチッという音が集まって、キーボードやドローパー、ベースペダルによって引き起こされる振動音のパターンを生むという原理に基づいて動く。

最近のTVドキュメンタリーでのCrispianの話によると、Jayは当初はVox Continental Organを持っていた（注意深い読者の皆さんへ…この楽器はThe Animalsのシングル“House of the Rising Sun”で上手く使われていた）。しかしながら、コロンビアレコードからかなりの前払金を得た後に、Darlington氏が自身で、1999年のKulaの解散まで使い切ったレスリー・キャビネット・アンプを備えたHammond C3を購入したことは、非常にあり得る。



今はなきMelody Maker誌の“クルーセクションからの視点”でのJayによる彼のセットアップの解説から引用する：「曲ごとにドローバーを微調整するんだ、もっともプリセットしてあるけどね。ハモンドは素晴らしい楽器だよ…」

アナログキーボード

全ての重要なハモンドの他に、JayはKurzweil PC88も使用していた。



PC88は実際はMIDIキーボードである。しかしながら、実際には本来の目的では使用されなかった。サンプラーであるRoland Super JV1080の音色を引き出すのに使われていた。



Kurzweilのキーボードは、Rolandに保存されたプログラムを選択するために使用され、それらは曲間に始動された。

これはJayがKula Shakerのツアーの経歴を通して使用したセットアップの中核である。スタジオでは、セットアップはさらにアコースティックピアノやメロトロンのようなキーボードを使用するために拡張された。だが今やKula Shakerは、現在Oasisで活動中のJay Darlington抜きで再結成しており、キーボードのセットアップはKurzweilとハモンドのシンプルな形に戻っている。

さて、Kulaオタクの仲間たち、次回まで別れを告げよう。

ではまた！

TME

Kula Shaker

